

# 千葉県における縄文時代丸木舟の出土例について

沖松 信隆

## はじめに

縄文時代の丸木舟に関して、千葉県では全国で最も多くの出土例がある。近年の全国集成（松井 2012）<sup>1)</sup>でも最多とされるが、県内の出土例については、千葉県史資料編（千葉県 2004）の集成が現在最も詳細に網羅している。千葉県史によれば、弥生時代以降を除く縄文時代の出土例は、時期不明を合わせて100例以上になる（鈴木・山岸 2004）。千葉県内の出土例の多くは県北東部に偏在し、九十九里浜北部の潟湖であった「椿海」周辺や、栗山川とその支流の流域で出土している。

千葉県史の集成から20年近く経過し、その間に再び

県北東部での出土例が増加するとともに、これまで出土例のわずかだった東京湾東岸地域において、市川市雷下遺跡で早期末の丸木舟が出土した（服部ほか 2019）本稿ではこうした近年の動向を概観し、2～3の問題点を抽出しながら地域的な特徴をまとめる予察としたい。

## 1. 栗山川流域遺跡群（九蔵地点）（第2図）

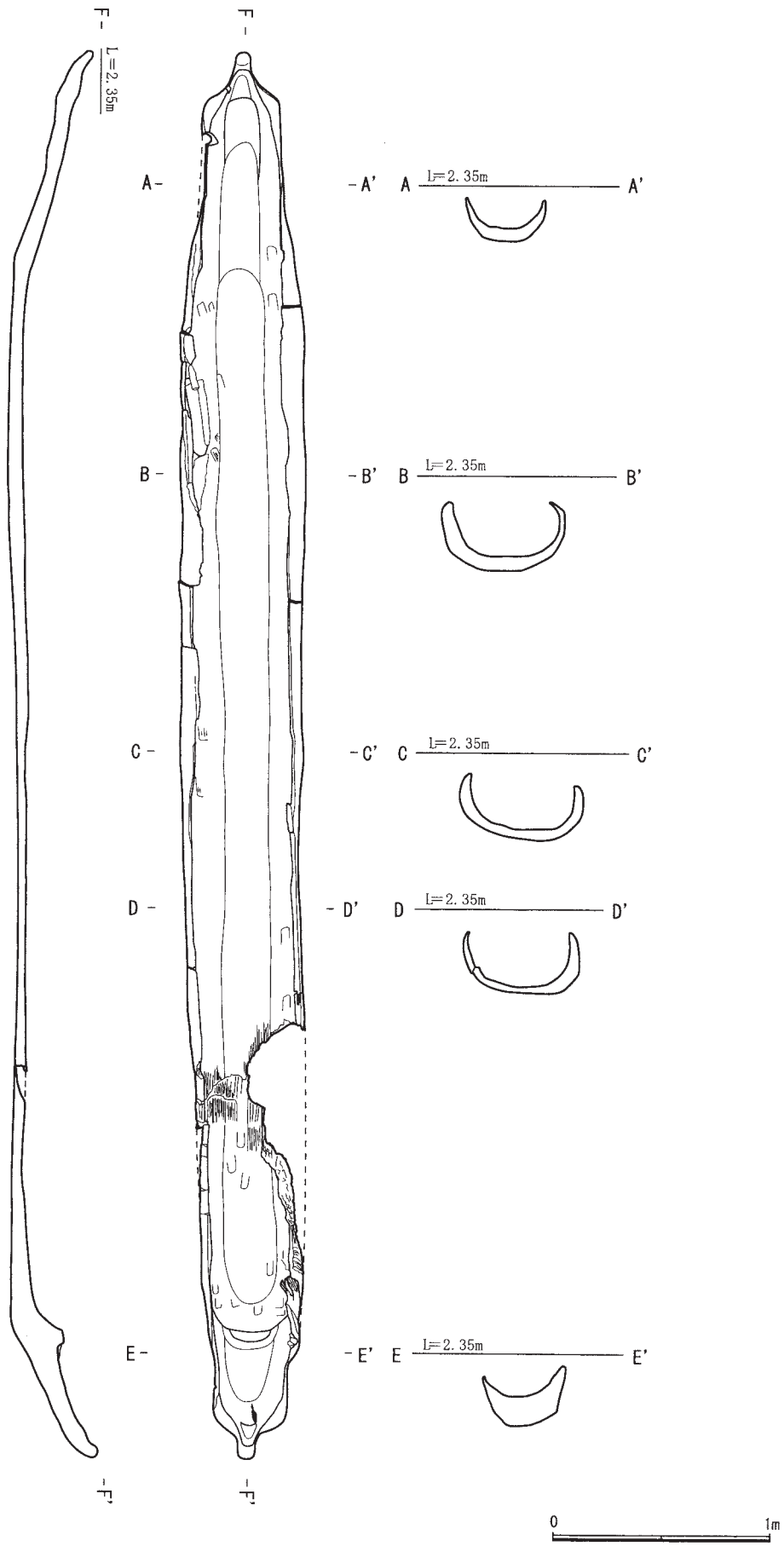
### 遺跡の概要と調査経緯

遺跡は香取郡多古町多古字九蔵503-1ほかに所在する。栗山川流域遺跡群は、千葉県の北東部に位置する栗山川中流域の低湿地から支流の借当川・高谷川・多



第1図 遺跡位置図（鈴木・山岸 2004）図1に加筆

1 栗山川流域遺跡群（九蔵地点）、2 雷下遺跡、3 多古田低地遺跡、4 高谷川低地遺跡



第2図 栗山川流域遺跡群（九蔵地点）出土丸木舟（戸村勝司朗 2009）

古橋川の流域に広がる遺跡群の総称で、昭和30年前後に行われた耕地整理や河川改修によって丸木舟が発見されてきた。後述する高谷川低地もその一つである。調査例としては、平成7年に多古町島地区の島ノ間遺跡で前期末の丸木舟がほぼ完全な形で検出された例（村山 1999）が特筆されよう。

調査地点の九蔵地点は多古町の市街地北東部に位置し、栗山川右岸の河岸沖積地にあたる。標高は4m前後で、現況の河岸からやや離れた水田の一角である。スーパーマーケット建設に伴い、平成19年に多古町教育委員会によって調査された（戸村 2009）。

#### 出土状況

遺跡の層序は、1層が現代の水田、2層が古代の遺物を含み、3層から5層にアシ等の植物遺体が多量に含まれる。6・7層で縄文時代の遺物を含む。3層から7層までは褐色ないし暗褐色の粘土やシルトであり、灰褐色の間層を挟んで9層以下は青灰色のシルトからなる海成層である。

丸木舟の出土した7層（暗褐色粘土ないしシルト）はヒシの実を多量に含み、クリの殻や木の葉、イシガイの殻皮を多く含んでいる。

丸木舟は、調査区中央からやや北西寄りの地点で、6層直下の7層上部（地表下約1.8m）から出土した。舟首を北西方向に向け、正位で検出された。ほぼ水平と言えるが、断面図ではやや北西方向に傾いている。舟尾側に近い部分が一部欠損しているが、ほぼ全体の形状を残している。

なお、櫂などの関連する木製品は検出されていない。

#### 舟体の特徴

全長6.51m、最大幅0.57mで、舷側の残りも良く、最大内深は25cmである。大方の部位で舟縁まで遺存している。舟体の厚みは舟縁で2～6cm、舟底で3～7cmを測る。

鯉節形の形態をしており、舟首と舟尾の先端は共に鋭く尖っている。舟首側の舟底は先端に向けて緩やかに立ち上がるのに対し、舟尾は舟底から段差を設けて一段高く作られている。境目には横梁状の削り出しがある。舟底の外表面は、舟首・舟尾側とも膨らみがあり、「イルカの頭部を逆さに見た様」である。

舟体の表面には焦げた炭化箇所があり、内面に多く見られる。石斧による加工痕はあまり見られず、平滑に作られている。放射性炭素年代測定の結果、3110±40BP（縄文時代後期）という数値を得ており、丸木舟周辺で出土した土器（加曾利B式）の時期とも一致

する。樹種同定の結果、材質はカヤ材であることが判明した。

## 2. 雷下遺跡（第3図）

### 遺跡の概要と調査経緯

遺跡は市川市国分七丁目ほかに所在する。当遺跡は千葉県北西部に位置し、東京湾最北部の湾奥部に面して開口した国分谷右岸にあたる、標高約6mの低湿地に立地する。東京外かく環状道路の建設に伴って新たに発見された。早期後葉の貝塚と遺物包含層が存在し、集石遺構や堅果類集積土坑などの遺構のほか、縄文時代早期の波蝕崖が検出されている。遺跡の北側は道免き谷津の開口部にあたり、縄文時代後期・晩期の道免き谷津遺跡に隣接する。

公益財団法人千葉県教育振興財団による平成13年度からの確認調査を経て、平成25年度の第8次調査（本調査）において縄文時代前期末の丸木舟が発見され、国内最古例として注目された。第10次調査（平成28年度）までの成果が報告書2冊（橋本ほか2017、服部ほか2019）として刊行されている。

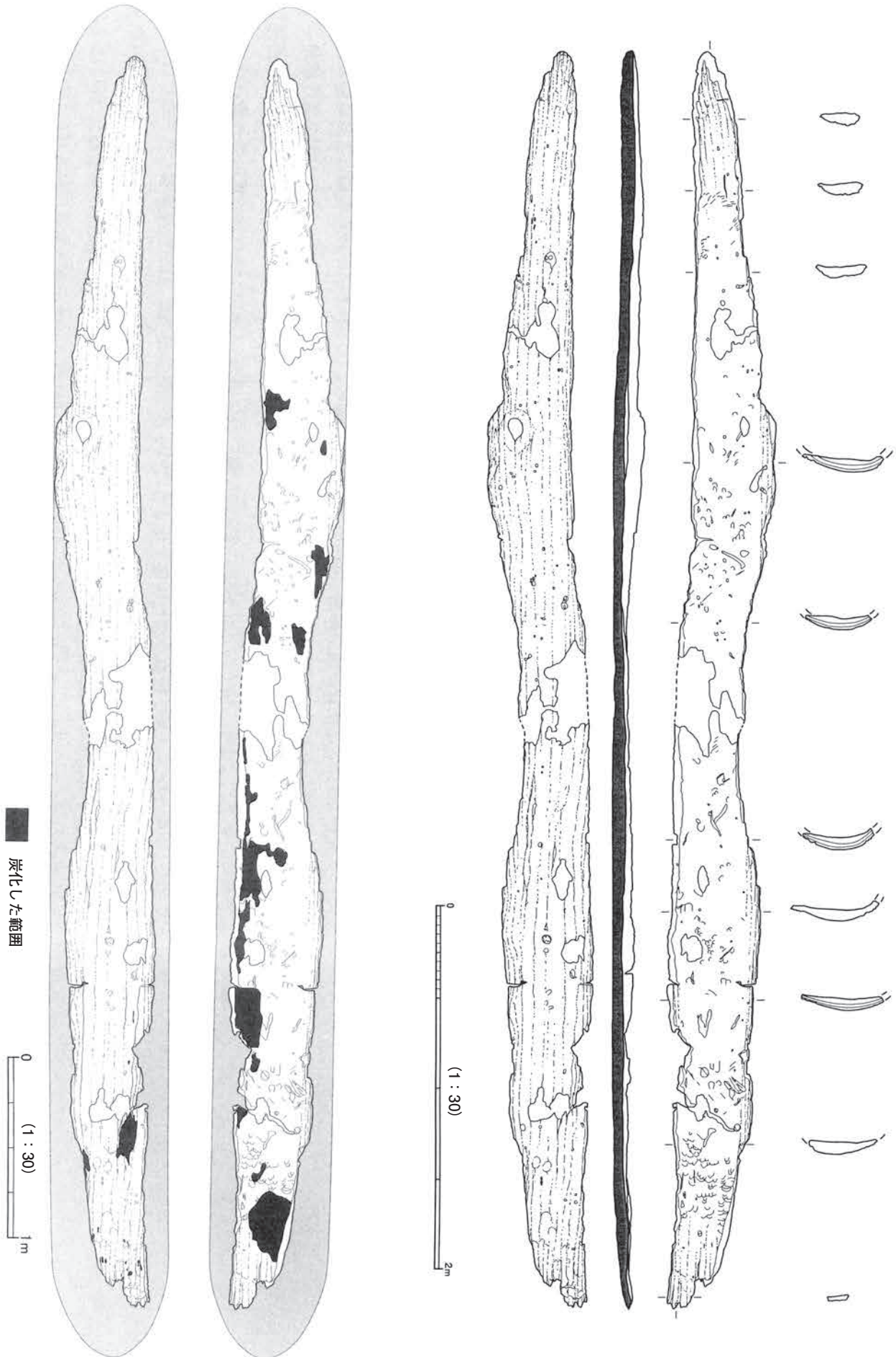
#### 出土状況

遺跡周辺の層序は、表土下の客土・水田層（Ⅰ層）、古墳時代～古代の草本質泥炭層（Ⅱ層）、縄文時代中期以降の木本質泥炭層（Ⅲ層）から成るが、当遺跡においては青灰色シルトないし砂質シルトのⅢ層が堆積している。Ⅲ層直下のⅣ層は遺跡の主体となる土層で、砂層と海成シルト層が互層となり、縄文時代早期後葉の貝層を包含している。

丸木舟は、この貝層の南西側外縁部で第5貝層に相当する砂礫層2から出土した。丸木舟を包含していた砂礫層2はオリーブ黒色シルト層で、植物遺体や炭化物を多量に含み、潮間帯に生息する生物の生痕化石が良好に観察できた（小幡 2014）。丸木舟出土地点は、既調査区（遺跡範囲）のほぼ中央にあたり、表土からの深さは約3mである。

舟体は、北西方向に舟首<sup>2)</sup>を向けて、ほぼ水平の状態に正位に検出された。舟尾側の先端部は欠損しているが、およそ全体の形状が推定できる。

舟体周囲には同一材の破片が散在していた。中央部の西側で検出された板状の部材は舷側の一部と考えられる。舟首側に、幹の部分と考えられる自然木が舟体と接する状態で検出された。この自然木の北西側で検出された木片は舟体本体と同一の樹種であったため、舟体の部材と判明した。このうち1点は舟首部材の可



第3図 雷下遺跡出土丸木舟 (服部智至・太田敬宏ほか 2019)



能性がある（沖松 2014）。丸木舟の直下から板状木製品が出土し、自然木の下から棒状木製品が2点出土した。また、舟体と自然木の間から、条痕文土器の尖底部が出土している。

舟体に直径1～3cmの貫通孔が多数確認されたが、これらは先述の生痕化石であることが確認された。このことは、埋没過程で位置が固定されていたことを示している。

関連する木製品として、第9次調査で榿木製品が1点出土したほか、雷下遺跡に特徴的な2本1対の棒状木製品が複数出土している。この木製品の用途については、報告では推進具という位置付けがされており、丸木舟のアウトリガーの可能性が指摘されている。（蜂屋 2019）

#### 舟体の特徴

検出された舟体の全長は7.04m（保存処理後、調査時計測値：7.2m）、最大幅0.53mである。厚みは、調査時の計測値では5～7.8cmで、舟尾方向に向かって薄くなる傾向がある。全体に平坦な印象があるが、舟首側・舟尾側ともわずかな立ち上がりが認められる。舷側の立ち上がりはほとんど残っておらず、中央部より舟尾側の右側面で10cmほど確認できた。

舟体の形状は、出土時北西側の舟首部分とみられる先端部がV字形に細く尖っており、反対の舟尾側も先細りの形状をしているが印象は異なる。先端部を欠損しているので本来の形状は不明である。舟体の内側には方向に規則性のある加工痕<sup>3)</sup>と、焦げ痕とみられる炭化箇所が認められる。一方、外面の舟底には加工痕はほとんど確認されず、樹皮が剥がれたままの状態となっている。辺材をそのまま加工したことがうかがえる。

調査時には、舟首側に舟底との境界<sup>4)</sup>を示す工具痕の存在を観察できた（沖松 2014）が、保存処理後の舟体にはほとんど確認することはできない（写真1）。ただし、その工具痕があったと推定される位置で、舟体を取り上げた後に破断したことがうかがえる。保存処理後の舟首側舟体の立ち上がりが調査時よりも失われていることも、その影響と考えられよう。その箇所に舟底と舟首の境界であったとすれば、1mを越える舟首の立ち上りを支える負荷がかかっていたことも想定される。

樹種同定の結果、材質はムクノキであることが判明した。また、14C年代測定の結果から、較正年代で7500cal B P前後の時期にあたることが判明し、遺物

の出土状況とも一致する。



写真1 雷下遺跡丸木舟（舟首一舟底境界付近）

千葉県教育委員会所蔵

### 3. 多古田低地遺跡（第4図、第5図）

#### 遺跡の概要と調査経緯

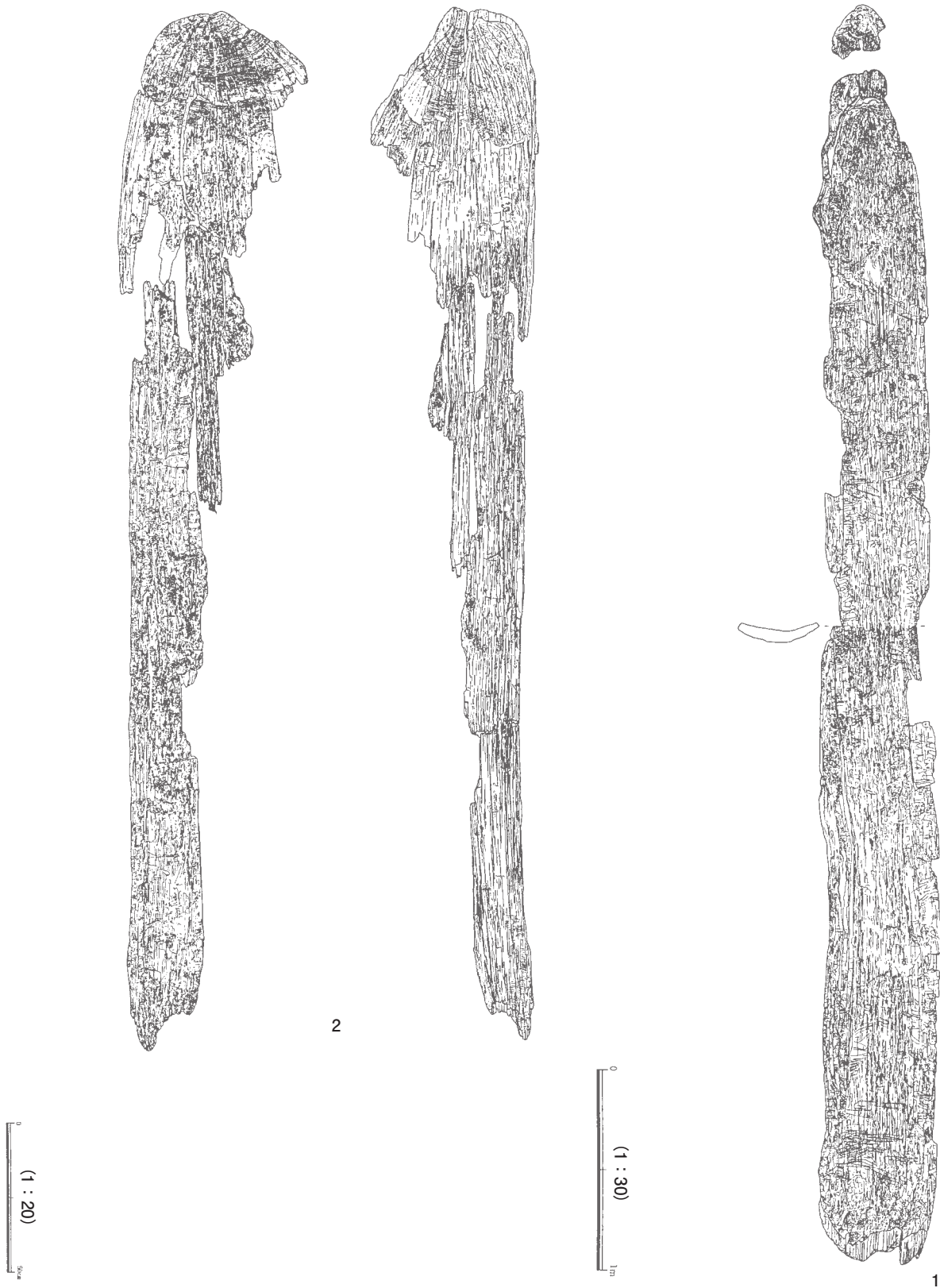
遺跡は匝瑳市飯塚字多古田7番地ほかに所在する。当遺跡は千葉県の北東部に位置し、九十九里浜によって形成された潟湖である旧椿海の汀線に近い、標高約5mの水田に立地する低湿地遺跡である。平成18年に旧野栄町と合併する以前は、遺跡のある豊和地区は旧八日市場市域に当たる。昭和37年に土地改良工事のための水路掘削によって偶然発見され、慶応大学による緊急調査が行われた。調査により、水田下の泥炭層から縄文時代後期・晩期の遺物が多数出土し、丸木舟の破片や多数の榿、漆製品の杓子などが出土している。

平成24年からは千葉県の圃場整備事業に伴い、2か年の確認調査を受けて、平成26年度と27年度に本調査が行われた。平成26年度に匝瑳市の委託を受けた有限会社勾玉工房が北側のⅠ地区を担当し、翌年度は公益財団法人印旛郡市文化財センターがⅡ～Ⅳ地区を担当した。（中山・喜多 2020）

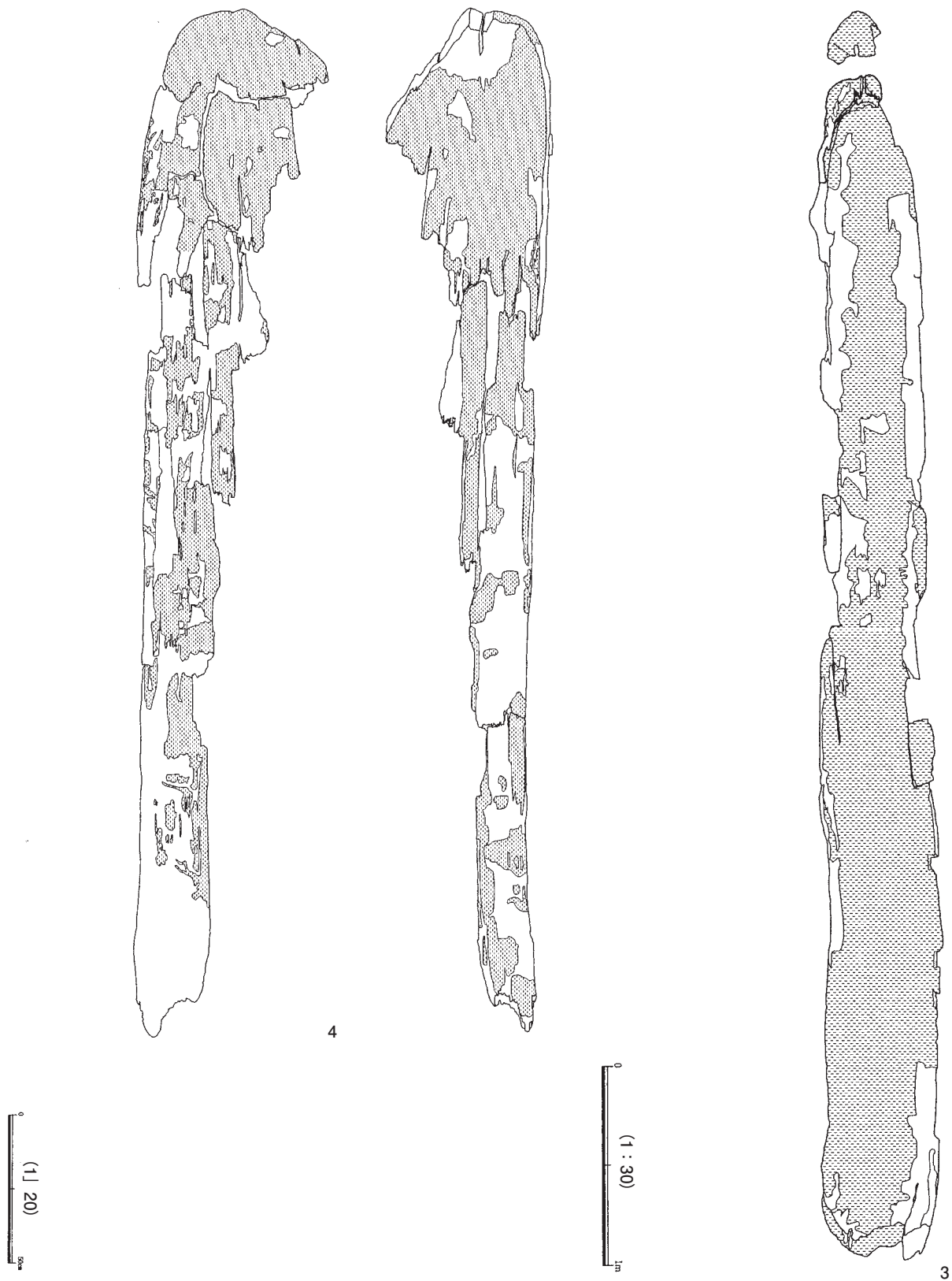
#### 出土状況

遺跡の層位は、本調査Ⅳ地区で地表から0.5～0.6mで暗褐色の泥炭層（第3層）に達する。この層は、遺跡発見の契機となった縄文時代後期・晩期の遺物を含む泥炭層である。今回の調査では、泥炭層の下に間層を挟んで青灰色のシルト層（第5層）を検出した。この層からは主に縄文時代前期・中期の土器が出土しており、早期後半の土器もわずかに含まれる。全体的には加曽利B式が多量に出土している。

確認調査と本調査を通じて多数の丸木舟が出土しており、点数にして17点が確認されている。概ね第3層



第4図 多古田低地遺跡出土丸木舟 (中山俊之・喜多裕明 2020)



第5図 多古田低地遺跡出土丸木舟炭化範囲図 (中山俊之・喜多裕明 2020)



からの出土である。本調査では492㎡の範囲におよそ6隻分以上の丸木舟を検出したことになる。このうち2隻はある程度全体像がわかるもの(4m級と6m級)で、別の2隻は調査区外に延伸している。

出土数の多さが特筆できるが、さらにこのち6m級の1隻(第4図1、第5図3)と調査区外へ延伸する1隻は、Ⅳ地区で近接して出土した。前者の内部や周辺では、加曾利B式の大型破片や復元可能個体が多数出土している。破片を除き、ある程度形状の分かる大型の個体は概ね水平に正位で検出されているようだが、Ⅰ地区の4m級個体(第4図2、第5図4)は外面を上にした状態で出土した。

なお、櫂については7点が出土しているが慶応大学の調査での約20本と比べると量的には少ない。

#### 舟体の特徴

最も残りの良い6m級個体(1・3)は全長6.27m、最大幅0.67mで、舟体の厚みは2.3cm～6.6cmである。報告を見る限り炭化範囲は内面に限られる。年代測定(放射性炭素年代法と酸素同位体比年輪年代法を併用)と樹種同定の結果、年代は約4,000～3,800年前、材質はカヤであることが判明した。先端部の形態に差異があり、出土時の南東側は先細っており、北西側は丸みを帯びて尖る形状と見られる。南東側を舟首とすれば、中央より舟尾側の左側面は舷側が比較的残っている。

Ⅰ地区の4m級個体(2・4)は、現状の全長3.47m、最大幅0.64mで、舟体の厚みは3.3～8.5cmである。先端部は片側のみ残っており、丸みを帯びて尖った形状をしている。内外面に炭化箇所が見られる。このほか調査区外へ延伸する2個体について、Ⅲ地区の個体は樹種同定の結果から材質がマツであることが判明し、Ⅳ地区の個体もマツと推定されている。どちらも丸みを帯びて尖る形状をしており、内外面とも炭化している。

出土した丸木舟で断面形状が明らかなものは、清水潤三氏の分類(清水 1975)によればすべて鰹節型に相当する。丸木舟と加曾利B式土器が伴出する状況を確認できることから、出土した丸木舟の年代は概ね縄文時代後期に属すると考えられる。6m級個体(1・3)の年代測定の結果とも一致する。

#### 4. 高谷川低地遺跡(写真2・3)

##### 遺跡の概要と調査経緯

遺跡は山武郡横芝光町谷台字西耕地470ほかに所在し、芝山町にまたがっている。当遺跡は前述した栗山

川流域遺跡群の一つで、栗山川の支流である高谷川両岸の標高約4mの水田に立地する低湿地遺跡である。昭和28年に縄文時代漆製品(櫛)が偶然発見されたことにより、慶応大学が発掘調査を実施して、縄文時代後期とみられる丸木舟や櫂を検出した。

平成27年度から首都圏中央自動車連絡道(圏央道)の建設にともない、(公財)千葉県教育振興財団による調査が開始され、平成29年度の確認調査で水田直下から縄文時代丸木舟が発見された。翌平成30年度には本調査が実施され、丸木舟の全体像が明らかとなった。(公益財団法人千葉県教育振興財団 2019a・2019b)

##### 出土状況

まだ正式な報告が公表されていないため詳述は避け



写真2 高谷川低地遺跡出土丸木舟(全景)  
(公益財団法人千葉県教育振興財団 2019b、同財団使用承諾)



写真3 高谷川低地遺跡出土丸木舟(舟首部分)  
(公益財団法人千葉県教育振興財団 2019b、同財団使用承諾)



るが、遺跡の層序は栗山川流域遺跡群や多古田低地遺跡とおよそ共通し、水田耕作土の下に縄文時代後期・晩期の泥炭層、その下に青灰色シルト層が堆積している。泥炭層は上下に分かれ、丸木舟はその中間から出土した。

出土地点は高谷川の左岸に面し、現川岸から約30m離れている。昭和28年の丸木舟出土地点にも近く約150mの距離である。平成29年度の別の本調査地点と合わせて、縄文時代後期・晩期の土器と共に木製品も出土している。「儀仗形木製品」と呼んでいるものが特徴的である。

舟体はほぼ水平に正位の状態で検出されている。両端部とも欠損していて正確な形状は不明だが、一方は先細る形状で、もう一方は丸みを帯びながら尖る形状か。

#### 舟体の特徴

全長は6.39m、幅約0.6mで、舟体の厚みは舟縁で1cmほどである。先細る形状の先端側を舟首とすると、舷側の立ち上がりは舟体右側面の比較的残りの良い箇所約15cmである。舟首とした側の先端部には丸い突起状の部分があり、装飾的な加工が施されている。丸木舟の使用年代は縄文時代後期後半から晩期前半とされる。

#### まとめ

ここまで4遺跡の出土例について見てきた。ここで取り上げた出土例から指摘できる点を列記したい。

- 栗山川流域遺跡群九蔵地点出土例は、両端対称形でありながら、舟底と明瞭な段差を持つ舟先を舟尾と判断している。これと呼応するように舟首側の立ち上がりが舟尾側よりも長くなっており、その形態は現代のボートにも通ずるのではないか。舟首・舟尾を区別する視点となろう。
- 雷下遺跡出土例は、現状では同一時期の類例が鳥根大学構内遺跡例（鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター 1997）に限られ、比較対照が困難ではあるが、伴出した棒状木製品の用途など、縄文時代の丸木舟全般の分析に有益な視点を提供している。肉眼で「炭化」と判断してきた黒変部位が、焦げによる炭化なのか酸化やタンニンの影響による変色なのか、あらためて区別する必要性も惹起された。また、生痕化石の存在<sup>5)</sup>は、従来報告されてきた舟体の孔を再検討する新たな視点となろう。

- 多古田低地遺跡出土例は、多数の個体が狭い範囲から出土する状況を示しており、舟着き場かあるいは廃棄場所のような性格を想定していく必要があるのかもしれない。また、ほかの遺跡を含めて多くの丸木舟がおよそ正位で出土するのに対し、舟底を上にした倒位で検出された個体例が注意を引く。他県を含めた他遺跡の類例も今後検討していきたい。
- 高谷川遺跡出土例については、まだ詳細が公表されていないので比較するには早い段階だが、栗山川流域遺跡群九蔵地点出土例の舟尾構造が示唆的である。
- 全体を通して、舟体外面における焦げとしての炭化の有無と加工痕との関係はどうなっているのか。

以上、今回取り上げた出土例から見えてきた分析視点について列挙してみた。今後は既調査例も含めて、総合的な分析を進めていきたい。

今回は資料を実見していないものもあり、報告書から読み取れていないところもあったかと思う。今後の調査の際に捕捉できれば幸いである。

#### 謝辞

執筆にあたり、次の機関・方々にご協力、ご指導をいただきました。記して感謝申し上げます。

多古町教育委員会、千葉県教育庁教育振興部文化財課、戸村勝司朗、大谷弘幸、平野雅一の各機関、各氏。

#### 註

- 1) 過去の集成（（財）滋賀県文化財保護協会編 2007）に準拠したものであり、「新規性はない。」（松井 2012）
- 2) 雷下遺跡の報告にもあるように（蜂屋 2019）、縄文時代の丸木舟は両端対称形が多く、舟首と舟尾の区別が難しい。ここでは、自然木と接していた北西側が南東側よりもV字形に細く尖っている特徴などから舟首とした。
- 3) 丸木舟の加工には磨製石斧を用いていたと推定されるが、雷下遺跡での加工具の主流として確認できるのは「礫石斧」と呼ばれる打製石器であった。山田昌久氏は「石斧標準装備化以前」と評価している。（山田 2022）
- 4) こうした、舟底の「挟り込まれた範囲とそうでない範囲」（舟先）を区画する構造は、新潟県青田遺跡で指摘されている（荒川ほか 2004）。
- 5) 新潟県青田遺跡においても、生痕化石の存在が指摘されている。（荒川ほか 2004）。

## 引用・参考文献

- 清水潤三 1975「日本古代の船」『日本古代文化の探求 船』  
横芝町 1975『横芝町史』  
西山太郎 1980「低地遺跡研究の覚-特に、九十九里地域を例として-」『史館』第12号  
財団法人千葉県文化財センター 1991『多古町南借当遺跡』  
千葉県文化財センター調査報告第195集  
鈴木公雄 1982「多古田泥炭層遺跡」『八日市場市史 上巻』  
八日市場市  
芝山町 1995『芝山町史 通史編 上』  
島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1997『島根大学構内井  
堰第1次調査橋縄手地区1』島根大学埋蔵文化財調査研究1  
村山好文 1999『栗山川遺跡群・島ノ間遺跡』多古町教育委員  
会  
辻尾榮市 2000「日本刳舟関係資料集成（北海道～東海・太平  
洋沿岸 予察報告1）『郵政考古紀要』第37冊  
荒川隆史・石丸和正ほか 2004『日本海沿岸東北自動車道関係  
発掘調査報告書V 青田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書  
第133集  
鈴木道之助・山岸良二 2004「(4)丸木舟」『千葉県の歴史  
資料編 考古4（遺跡・遺構・遺物）』千葉県  
千葉県 2004『千葉県の歴史 資料編 考古4（遺跡・遺構・  
遺物）』  
(財)滋賀県文化財保護協会編 2007『丸木舟の時代 びわ湖  
と古人』サンライズ出版  
戸村勝司朗 2009『千葉県香取郡多古町 栗山川流域遺跡群（九  
蔵地点）』多古町教育委員会  
松井哲洋 2012「丸木舟を訪ねて(1)-出土丸木舟観察時の要  
点と縄文時代丸木舟について-」『研究報告』第16号  
千葉県立関宿城博物館  
沖松信隆 2014「雷下遺跡の概要」『研究連絡誌』第75号 特  
集 低湿地遺跡の自然科学的分析-市川市雷下遺跡・道免き  
谷津遺跡- 公益財団法人千葉県教育振興財団  
小幡喜一 2014「市川市雷下遺跡にみられた生痕化石」『研究  
連絡誌』第75号 特集 低湿地遺跡の自然科学的分析-市川  
市雷下遺跡・道免き谷津遺跡- 公益財団法人千葉県教育振  
興財団  
橋本勝雄・大久保奈奈 2017『東京外かく環状道路埋蔵文化財  
調査報告書12-市川市雷下遺跡(5)・雷下遺跡(6)・松戸市  
上矢切南台遺跡(9)-』千葉県教育振興財団調査報告第768  
集  
公益財団法人千葉県教育振興財団 2019a『縄文時代の丸木舟  
横芝町 高谷川低地遺跡 見学会』  
公益財団法人千葉県教育振興財団 2019b『房総の文化財』  
VOL.58  
蜂屋孝之 2019「第7章 まとめ 第3節 丸木舟について」  
『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書14-市川市雷下  
遺跡(1)~(4)・(7)~(10)-』『東京外かく環状道路埋蔵文  
化財調査報告書14-市川市雷下遺跡(1)~(4)・(7)~(10)

- 』公益財団法人千葉県教育振興財団  
服部智至・太田敬宏ほか 2019『東京外かく環状道路埋蔵文化  
財調査報告書14-市川市雷下遺跡(1)~(4)・(7)~(10)-』  
千葉県教育振興財団調査報告第780集  
中山俊之・喜多裕明 2020『千葉県匝瑳市 多古田低地遺跡-  
豊和 埋蔵文化財調査業務-』公益財団法人印旛郡市文化財  
センター発掘調査報告書第367集  
山田昌久 2022「縄文時代の丸木舟」『季刊 考古学』161  
雄山閣